

池田大作の教育思想

—家庭教育の観点から—

井 上 比呂子

はじめに

1. 1960～80年代の家庭教育・幼児教育に関する研究

- ① 当時の社会的背景と教育問題
- ② 家庭の機能と作用
- ③ 母親・父親の役割
- ④ しつけに関する研究

2. 池田大作の家庭教育観—婦人雑誌の寄稿記事を中心に

- ① 人間主義・人間教育とは
- ② 妻としての生き方
- ③ 母としての生き方
- ④ 父親のあり方
- ⑤ 生命の尊厳の尊重
- ⑥ 池田思想の独自性

終わりに

はじめに

池田大作（創価学会名誉会長、創価大学創業者、以下「池田」と記す）には、教育者としてだけでなく、作家、詩人、文筆家としての顔がある。彼は、専門的な仏法思想に関する書籍のみならず、平和、文化、教育というSGI（創価学会インタナショナル）の基本理念を軸にした提言や世界の各識者との対談集、創価学会の歴史を小説の形で綴った『人間革命』『新・人間革命』、さらに少年少女向けの童話や日本や世界各地の自然を題材にした写真集など、幅広く執筆の領域を広げている。また、一般書籍だけでなく、週刊誌や月刊誌などの雑誌で宗教、教育、文化芸術、平和活動などについて多くの記事を寄稿したり、インタビューも受けている。

池田の教育観については、上記の単刊著作をはじめとし、「教育提言」「SGI提言」などのさまざまな著作が存在する。学校教育、なかでも彼が創立した幼稚園から大学までの創価一貫教育機関における、創立者としての指導・スピーチに関しては、開学から現在に至るまでの資料も存

在している。池田の理念・思想についての先行研究をみていると、学校教育におけるものが多く、家庭教育に言及した研究はまだ少ない。そこで、今回は池田の教育思想を家庭教育の観点から考察していただくことを目的とする。資料として1960～80年代の、おもに婦人雑誌に掲載された家庭教育、子育てに関する池田の寄稿記事を用いる。その時期は、講談社や主婦と生活社などから出版された婦人雑誌に、多くの頻度で池田の家庭教育に関する寄稿記事や教育についてのインタビューが掲載されている時期であり、これらの記事・インタビューなどは彼の教育思想の一端を知る上で貴重かつ有益な資料の一つと考えられるからである。そこには、創価学会という一宗教団体の会長、名誉会長としての立場としての随筆も多いが、一人の家庭を持つ父親として、「夫婦とはいかに生きるべきか」「母としてのあり方」「子どもをどのように育てていくべきか」など、彼自身の家庭教育観にふれているものも多い。中には、『家庭革命』⁽¹⁾『創造家族』⁽²⁾のような書籍の形で、再収録されて出版されたものもあるが、多くの記事は書籍になってはいない。池田自身が一家の3児の父として子育てを経験していた時期に掲載された寄稿記事などを検討しながら、家庭教育に関する池田の観点や主張をまとめ、整理するなかで、池田の教育思想を貫く論点や他の教育思想には見られない視点を考察していきたい。これは地道な作業ではあるが、これからの池田研究を、多角的な視点を持って進めていくための一つの基礎的な研究として必要なものとする。

そのために、今回は池田の思想をより広い視野からとらえる意味でも、当時の主流であった家庭教育に関する思想や研究についてふれてみたい。まずは同時期の社会的背景や主要な教育問題、また家庭教育に関する研究などを取り上げるなかで、家庭教育に関して、おもに母の役割や子育てについての思想、また実際の家庭状況についての研究結果についてみていきたい。池田自身も、その歴史的、社会的背景の影響を受けているに違いないだろうからである。高度経済成長のなかで、核家族が増加し、家庭のあり方として性役割分業がなされていた1960～80年代は、2008年の現代とは「家庭」のとらえ方において異なる部分もあるだろうが、その当時どのような教育問題が取り上げられていたかについてみていくことは意味があるだろう。家庭教育や幼児教育に関する専門書や研究論文と池田の寄稿記事に見られる思想とを対照させることにより、池田の思想の独自性、また他の教育学者との共通点などについても浮き彫りにすることができるのではないかと考えるからである。その上で、現代の家庭教育にも資する新しい知見を提供することができるだろう。

1. 1960～80年代の家庭教育・幼児教育に関する研究

ここでは、次章で言及する池田の寄稿記事が出版された1960年代後半から80年代前半と同時期に出された、家庭教育に関する書籍や論文をいくつか紹介したい。一般の幼児教育・家庭教育に関する研究書などを概観してみると、池田の主張との間に多くの共通点が見受けられる。それは、母と子の信頼関係や安定した夫婦関係の重視、子どもの人格の尊重、またしつけの一貫性の重視

(1) 池田大作『家庭革命』聖教新聞社、1976年。

(2) 池田大作『創造家族』聖教新聞社、1979年。

などであるが、ここで、いくつかの論文や研究を例にあげてみたい。

① 当時の社会的背景と教育問題

まず、その当時の社会的状況をふりかえってみることにする。1960年代後半～1980年代は高度経済成長の後半期と重なり、日本の家族自体も大きな変貌を遂げている時代とも言われる。その時期の家族の第一の特徴は、産業化、都市化、国際化などに伴う核家族化であろう⁽³⁾。明治以降の日本の家族のあり方を規定してきた「家」制度から戦後の夫婦家族制になり、形態としては、三世代からなる大家族から夫婦とその子どもという核家族に移行してきたことがあげられる⁽⁴⁾。特に都市部の核家族は血縁的にも他とのつながりをほとんど持たず、地域とのつながりも希薄で、孤立化している状況も見受けられる。さらに、家族理念に関しても、家長を中心とした権威主義などの特性を示す「家」意識から脱却して、平等主義、個人主義の家族意識へと、家庭生活自体が民主化の方向をたどっている。

また農業などの第一次産業が減少するかわりに、いわゆるホワイトカラーの職種が増え、多くの父親は会社員、サラリーマンとして働くようになり、職と住の分離が起こり、これがひいては家庭における「父親の権威の失墜」や「父親不在」ともいわれる一つの原因ともなっている。このように、農耕時代の労働から工業化社会への変化は、父親が仕事、母親が家事というように父親と母親の役割を明確に分業化することとなった。さらに、工場や会社が求める労働力は父親を家から離し、家庭生活に対する経済面での供給者へと変えていったといえる。それによって、父親は子どもにとって「見えない (invisible)」状態となり、物理的・空間的に不在だけでなく、それ以上に精神的にも不在になってしまったといえよう⁽⁵⁾。

また、家庭の成員が、仕事、学校とそれぞれ個別に活動することが増えることにより、各人の個人的要求も増え、子育てが一段落した母親の社会への進出などといった事項が、親子間、また夫婦間のコミュニケーションの不足を生み出すといえよう。家族と個人との結びつきが、かつては家族集団や親族の一員であるという意識が大きかったのに対し、現代では家族を個人のニーズを充足させるための集団的な場、あるいは個人が人生を選択していく際の一つのオプションという形に変化してきているといえる⁽⁶⁾。

教育問題との関連で見えていくと、日本は、高度経済成長期に、高等教育への進学率が上昇するに伴い、受験産業の隆盛、受験時期の低年齢化が進んだ。それにより、子どもは、学校だけでなく、塾や家庭でも勉強を強いられるようになった。つまり、幼児期から児童期に至るまで、親の子どもに対する学歴期待が高いために、しつけの場面においても学業や知的能力の向上が優先され

(3) 一番ヶ瀬康子「家族問題と女子教育—国際家族年との関連で」『現代家庭の創造と教育 女子教育研究双書⑨』、ドメス出版、1995年、67～78頁。

(4) 望月嵩「第三章 ゆらぐ家庭と教育機能」河野重男、俵谷正樹・編 『21世紀への家庭教育』美巧社、1986年。

(5) 高橋宗「現代の父親像(1): 父親に対する調査データを手がかりとして」『聖隷学園聖泉短期大学人文・社会科学論集』1987年、103～124頁。

(6) 伊藤良高・中谷彪・浪本勝年 編著 『現代の幼児教育を考える [改訂新版]』北樹出版、2003年。

がちであり、基本的な生活習慣を身につけることさえもおろそかにされやすい傾向におかれたというのである⁽⁷⁾。このように、受験戦争のなかで、親や子供は学歴による差別化などの価値観や、世間体には振りまわされ、確固たる家庭での教育の信念を持つことができにくくなっており、これは大きな問題といえよう。

1972年の幼児を持つ母親の教育意識に関する研究では、『望ましい子ども像』として「健康な子」に次いで、「勇気と根性のある子」「人に迷惑をかけない子」といった項目が上位に入ってきていた。この結果から、学力的な側面も大事であるが、人格的な側面、特に社会的に協調性のある子に育てたいという親の要望を見ることができる⁽⁸⁾。さらに、子どもへの進学期待としては、自分よりも高い学歴を望む親が多く、特に男子には「大学以上」の学歴を期待する母親が多かった。これは、社会における学歴の持つ意味が大きくなり、人生を考えるうえで仕事と学歴の関係が大きく見直され、また職場での地位向上に学歴が大きく機能しうることが親にも実感されてきていることの証左といえる。1985年の総理府の調査によると、子どもに受けさせたい教育の程度は年々上がっており、「高校まで」と答えた親は男子の場合16.2%、女子の場合33.9%、「短大、大学、大学院まで」が男子では54.0%、女子で36.1%となっており、ここでも親がわが子に高い学歴を望む傾向が見られる⁽⁹⁾。

また、1960～70年代にかけて、先に述べたような核家族の家庭形態へと主流が変わったことにより、しつけのやり方に関しても変化が生じている。従来の厳しい権威的なしつけを受けてきた親の世代からすると、「子どもの立場と個性を重視する」という、いわば子ども中心の新しい児童観は、親のしつけ方針をとまどわせることとなっている。子どもの立場を重んずることが、単なる甘やかしや溺愛になってしまったりすることもあり、親は一体どのようにしてわが子を育てればいいのかということに、自信を失っている部分も見受けられる⁽¹⁰⁾。

このような社会的背景をふまえると、家庭教育というものを定義するとすれば、過去、つまり1960年代以前は「職業技術と生活態度等主要な教育内容」を教えるものであったのが、1970年代に入ると、家庭の形態や児童観の変化により「幼児期におけるしつけと学童期における家庭学習」が主な課題となってきており、家庭教育の重点が行儀作法や職業訓練といった観点から、就学前教育といった認知的・学力的な側面を重視したものに变化していることがわかる⁽¹¹⁾。

② 家庭の機能と作用

そこで、家庭とはそもそもどのような機能を持つ存在だと見なされているのだろうか。家庭の機能は、簡潔に分けると以下の4点に集約されるといわれる。

(7) 原田彰・編『子育て「大変な時代」』教育開発研究所、1996年。

(8) 野垣義行「幼児をもつ母親の教育意識と家庭教育の実態しつけにおける世代間の連続性を中心に：横浜市における調査結果の報告（1）」横浜国立大学教育紀要、1972年、vol.12、72～109頁。

(9) 文部省「現代の家庭教育—小学校高学年・中学校期編」文部省、1992年、総論7頁。

(10) 山下俊郎『家庭教育』光生館、1979年。

(11) 牛島義友『家庭教育と人間形成』国土社、1973年、75頁。

- ① 家庭経済機能—所得と消費の場
- ② 情愛的機能—夫婦愛、親子愛、兄弟愛の場
- ③ レクリエーション的機能—憩いの場
- ④ 人間形成的機能—保護養育、教育の場⁽¹²⁾

ともすれば、④人間形成的機能ばかりに目がいきがちであるが、前の①②③が背景にあってはじめて④が順当に行われるという構造があるといえる。また4つの要素は常に相互に影響しあい、からみあっているともいえる。

また、家庭は、子どもが何か問題を抱えた時に、子どもをいやし助ける機能を持つ。家庭の役割の重要性として、以下の5点があげられる。

- ① 傷ついた心をいやす家庭—家庭の持つ「社会化」「安定化」の2つの機能、つまり「しつけ」と「いやし」の働きを発揮し、子どもにとって心落ち着ける「居場所」となることが必要である
- ② 安心して自分を表現できる家庭—自分の悲しみ、怒り、つらさ、悔しさ等の感情を気兼ねなしに表すことができる。
- ③ 所属感・自己有用感を味わえる家庭—「家族にとってあなたは絶対に必要な大事な人」というメッセージを受けることは、子どもにとって自己有用感を充足させ、セルフエスティーム（自尊感情）を満足させる。
- ④ 「学び合い」の場としての家庭—例えば、いじめについて家族全員が意見を述べ合うなど、ひとつのことを学びあう経験を持つ
- ⑤ 豊かな情報を収集する家庭—子どもが学校では見せない顔を見せられるようにする⁽¹³⁾

このように、経済的機能だけでなく、子どもの心を育むという観点において、多くの役割が家庭には備わっているといえる。

また、家庭は、子どもの出生直後から始まる生育環境として第一のものである。家庭教育とは、すべての教育の中で最も早く始まる教育といえよう。その意味で、家庭の第一の機能は子どもに心理的な保護を与え、外界の危険から守る保護的機能といえよう。さらに、子どもの自立のための準備をする、つまり年齢に応じた社会化を促すという教育的機能も有する。そもそも、人間は、自分が属している集団の成員との相互作用を通じてその集団の行動様式、規範を内面化し、自分に期待されている役割を取得することによって、「その集団における自己」を確立していく。これを社会化の過程というが、人間が生まれ落ちてから最初に入る集団といえれば、これは家庭であり、人生の最も重要な初期の社会化の媒体として、家庭の持つ価値規範、雰囲気、養育者は幼児にとって非常に大きくかつ決定的な影響力を持っていることを忘れてはならない。その意味で、家庭教育の意義、重要性は計り知れないといえる。

⁽¹²⁾ 伊勢孝之「子どもの健やかな心を育む親の役割」、尾田幸雄監修 茂木喬・蛭田政弘編著『「心の教育」実践大系 家庭における心の教育』所収、日本図書センター、1999年、71頁。

⁽¹³⁾ 嶋崎政雄「いじめに悩む子どもの心と家庭の役割」、尾田『「心の教育」実践大系 家庭における心の教育』所収、186～187頁。

家庭生活について、平田は「歴史的に、また、現代社会の中で、婚姻・血縁関係などによる『家族』という集団が、住居を容器として、空間・時間・物財を共有しながらいとなんでいる『生活』としての事実現象」であると定義している⁽¹⁴⁾。その定義によると、所属している外部社会の持つ風土的・文化的・経済的・政治的条件や、家族構成、世帯主の属性（職業、収入など）、住居形態、交通状況などによって、家族のあり方は千差万別といえる。つまり、家庭とは、単に物的環境としてだけではなく、情愛と血縁によって結合された家族成員たちが夫婦・親子・同胞などの関係で生活を共にする場所という点に大きな特質があるといえよう。

このように見てくると、家庭における教育的機能を称して家庭教育と呼ぶということもできるであろう。この「家庭」の教育的機能の特徴として、平田は学校教育との相違点として、意図的、無意図的という言葉を使用している。彼は、「教育」には意図的教育と無意図的教育があり、家庭教育は後者の意味が大きいとしている。つまり、家庭生活のいとなみそのものが、子どもにとっては教育的作用を及ぼすものであり、そこでの人間相互の関係やそこで伝達される価値観、習慣、言語、行動様式といったものが子どもの発達に大きな影響を与えていくということであろう⁽¹⁵⁾。

また、家庭ははじめての「人間関係を学ぶ場」であるといえる。家庭での両親、きょうだい、祖父母との交流の経験を経て、子どもは基本的な社会的スキルを身に付けていく。こうして基本的な相手とのコミュニケーション、意思疎通のトレーニングを重ねるなかで、社会性・協調性・自己制御能力・自己主張能力の基礎を育む。子どもが発達する家庭で学ぶ人間関係には、「信頼、愛情、甘え、支配、依存、差別、性、など人と人との間のあらゆる関係、内容」が含まれている⁽¹⁶⁾。人間関係に関しては、他人とのコミュニケーションのとり方、自分との地位（位置関係）と役割、また他人の感情を理解することを学ぶという観点がある。

さらに、家庭は子どもの揺るぎない「自己信頼感・自己肯定感」を育む第一次的集団ともいえるであろう⁽¹⁷⁾。自己肯定感を育むには、自分の強さも弱さも含めた全存在を受け止めてくれる場所が必要である。幼稚園や学校などのより社会的な場も発達の拠点となりうるが、まずは家庭環境が子どもにとって最重要と言えるであろう。では、どのようにしたら自己信頼感や自己肯定感を形成することができるのだろうか。自己信頼感は、自分自身の存在・能力を信じることのできる力であり、自己肯定感は、自分を自分として受け止め、認めることである。これらのことが基礎にあれば、自己主張もできるし、他者からの批判を冷静に受け止めることができ、揺るがない自己を確立していくことができる。それには、「自分が自分であって大丈夫だ」という確信をつかむことであり、自我の形成がポイントになってくる。岡村・金子によると、自我には、他者をくぐらない自分だけの「自我」と、他者の視点を考慮した上で、自己制御を経てはじめて獲得で

⁽¹⁴⁾ 平田昌『『家庭科教育』と『家庭教育』：こどものSocialization過程として』日本家庭科教育学会誌、1968年、第9号、3頁。

⁽¹⁵⁾ 平田『『家庭科教育』と『家庭教育』：こどものSocialization過程として』。

⁽¹⁶⁾ 佐伯 胖・黒崎勲・佐藤学・田中孝彦・浜田寿美男・藤田英典 編 『岩波講座 現代の教育 第7巻 ゆらぐ家庭と地域』岩波書店、1998年、76頁。

⁽¹⁷⁾ 高垣忠一郎『生きることと自己肯定感』新日本出版社、2004年。

きる「第二の自我」があるという⁽¹⁸⁾。そのなかで、自己主張が中心の自分だけの「自我」から、他者との交渉を通しての自己制御力形成期にあたる「第二の自我」へのスムーズな移行ができることが望ましい。「第二の自我」の移行に急ぐあまり、最初の「自我」が十分保障されないと、自己信頼感・自己肯定感と結合した自我の形成がなされにくくなるとされている。岡村・金子は、幼稚園での幼児観察の研究を通して、発達の過程において、自己主張の強い子どもも、十分に最初の「自我」の形成の時期を保障することによって、自ら他者との接近要求を示す時期を持ち、その過程を経て、自己制御能力を含む「第二の自我」を形成していけるということを検証した。このように、これら2つの「自我」をきちんと主体的に形成することにより、自己信頼や自己肯定がはじめて可能になるといえる⁽¹⁹⁾ この自己肯定感というのは、決して他人と比較して自分が優れているからとか、自慢できることが多いからとかいった理由で「自分を肯定する」という感覚ではない。自分の短所や弱い部分もよい部分もすべて含めて自分が存在しているのはいいことなのだ、許されているのだと、自分をまるごと肯定するというレベルの自己肯定感であるといえる⁽²⁰⁾。

③ 母親・父親の役割

次に、1960～70年代の社会的背景をふまえたうえで、その時期における家庭教育、なかでも親の役割について言及している研究をいくつか参照したい。

まずは、母親の役割についてみていきたい。母親の愛情というものは子どもにとって決定的なものであり、特に、それに感応する時期が幼いときであればあるほど、大きな影響力をもつといえる⁽²¹⁾。家庭での子育てに関しては、親が子どもを一方向的に教育するという考えもあるが、ここでは親自身が成長していくという観点が抜け落ちているといえる。松本は、親と子の関係について、「共に成長する」をいう基軸を持つことの重要性を強調している⁽²²⁾。彼は、子どもを育てるためには親も人間的に成長する必要があると主張し、「自分の生き方を持ち、子供を一人の人間として認め、子供と共に成長する親」であって、はじめて子育てが可能であると説いている。「子育て」は「自分育て」であると決めて母親自身が日々成長し、人間的な豊かさを持つことが、結果として心豊かな子を育てることになるのだといえよう。つまり、母親が変わることが、子どもにとっても大切であるという自覚が必要なのである⁽²³⁾。そうすることにより、子どもの立場になって考えることができ、子どもの成長に合わせて、家庭における教育の実践を行うことができるといえる。

家庭教育のとらえ方についてであるが、森は「家庭そのものが一つの小さな社会であり、その

⁽¹⁸⁾ 岡村由紀子・金田利子 『年齢別 保育研究 4歳児の自我形成と保育～あおぞらキンダーガーデン・そらぐみの一年～』 ひとなる書房、2002年。

⁽¹⁹⁾ 岡村・金田 『年齢別 保育研究 4歳児の自我形成と保育～あおぞらキンダーガーデン・そらぐみの一年～』、85頁。

⁽²⁰⁾ 高垣 『生きることと自己肯定感』、171頁。

⁽²¹⁾ 森重敏 『乳幼児の教育⑤ 子どもと家庭環境』 福村出版、1968年。

⁽²²⁾ 松本一巳 『甦る教育9 親と子どもの心を拓く』 第一法規出版株式会社、1989年、7頁。

⁽²³⁾ 松本 『甦る教育9 親と子どもの心を拓く』、25頁。

生活は、小社会生活とみることができます」⁽²⁴⁾と述べている。つまり、家庭のなかにもうひとつの小さな社会が存在し、そこで成員同士の人間関係が構成されているというわけである。その意味でいえば、家庭は本当に社会に入る前段階の、いわば社会生活の練習の場であるといつてよい。

家庭生活と家庭教育との関係について、木下は「家庭教育は家庭生活とは別にあるのではなく、家庭生活そのものが家庭教育機能を発揮するものである」と強調している⁽²⁵⁾。つまり、望ましい家庭生活を作り出すのは、家庭における望ましい人間関係であり、なかんずく夫婦関係が良好であることをあげている。

親子の関係の重要性について、村上は以下のように述べている。「親子の関係が、その後の人との人間関係につながっていく、つまり、親子の関係がいびつで、きちんとした人間関係（愛の関係）を結べなかった子どもは誰とも本来の人間関係を結べない」⁽²⁶⁾。このように本当の愛情と信頼関係に裏打ちされた家庭団欒や夫婦関係、親子関係が子どもの健全な心身の発達や社会性に大きな影響を及ぼすことがいえる。

次に、しつけにおける父親の役割についてみていきたい。今までは、父親は子どもにとって一番こわい人であったはずが、父親不在になると、だんだんと身近にいて頻繁に叱られることが多い母親の方がこわい存在になってくるようである。だが、いわゆる世の中の厳しさや、人間関係の難しさ、世の中のルールなどは、家庭の中では主に父親から学習されるべきものである⁽²⁷⁾。いわば父親は家庭と社会とを結びつける仲介者であるとともに、子どもの前では「世の中」を代表していることを期待されているといえる。また、父親は家族の一員として、また世帯主として家族全体をリードし、まとめていく役割もあるであろう。

④ しつけに関する研究

次に、しつけについてのいくつかの研究を紹介したい。そもそも、しつけとは何か。どのような営みをさすのであろう。柴野らは「現代のしつけ状況と社会化エージェント」のなかで、しつけとは「ある社会・集団ないし組織に共有的な規範体系に基づく価値の呈示と行為の規制を通して、基本的な知識・技能・動機づけおよび行動様式を習得させ、状況適応と成員性の付与をはかろうとする予期的社会化の一形式」と定義している⁽²⁸⁾。また、山下はしつけのことを「教育者が、望ましいと思う行動の様式を、そのまま端的に教育されるものの上に、いわば移植する方法」だとしている⁽²⁹⁾。つまり、しつけは社会化の一形態であって、心理学的にみると大きな意味での習慣形成といえるであろう。それは、日常生活を通して子どもに、基本的な習慣・価値体系、態度、行動様式などを体得させる過程であるといえる。その意味で、家庭におけるしつけ

⁽²⁴⁾ 森『乳幼児の教育⑤ 子どもと家庭環境』、62頁。

⁽²⁵⁾ 木下正雄「家庭教育を考える」園田学園女子大学論文集、1981年、73頁。

⁽²⁶⁾ 村上梁子「家庭教育について」清和女子短期大学紀要、1999年、23～24頁。

⁽²⁷⁾ 桂広介、長島貞夫、真仁田昭、原野広太郎・編『母親の役割 家庭教育選集第4巻』金子書房、1981年。

⁽²⁸⁾ 柴野昌山、稲垣恭子、新堂粧子、石戸教嗣、山本雄二、森繁男「現代のしつけ状況と社会化エージェント：しつけの社会学（その1）（Ⅲ－3部会 社会化）」日本教育社会学会大会発表要旨集録、1986年、159頁。

⁽²⁹⁾ 山下『家庭教育』、102頁。

は子どもの性格形成の側面に深く結びついている。

幼児教育に関する数々の研究では、母親の生活態度・養育態度や思考形態および価値観が、子どもの人格の形成や価値観、行動パターンの習得に大きく影響を及ぼすものと考えられている。森は、親の態度が家庭全体の雰囲気・性格に大きい影響を及ぼすことについてふれている。例えば、親の子供への接し方によって、非常に専制的な家族関係にもなりうるし、あるいは民主的・協同的な家族関係になりうるのである⁽³⁰⁾。彼は、サイモンズの臨床研究を引きながら、親に愛されている子どもとそうでない子どもの違いについて分析した。彼は、親子関係をとらえる態度として「受容—拒否」「支配—服従」の2要因を中心に分析した場合、受容されている（愛されている）子どもと、拒否されている（愛されていない）子どもの間にどんな行動の違いがあるかを比較した。結果は、受容されている子どもは、「情緒が安定で、よく社会化されており、おだやかで、思慮があり、興味をもち、賞賛すべき性質」を持っているが、拒否されている子どもは、「情緒不安定、活動過多で落ち着きがなく、社会に対して反抗的であり、冷淡で無関心である」という違いが出た⁽³¹⁾。これは、従来の先行研究とも同じ傾向になったが、受容されている子どもは全般的に望ましいとされる社会的行動・性格を身につけているといえる。このような研究から、親が子どもを受容することがいかに重要かということがわかるであろう。

松原は、親の基本的習慣のしつけのやり方を、以下の8つのタイプに分けた。

- ① 甘やかし型（子どもの要求を盲目的に受け入れ、時には子どもに対して犠牲的に奉仕する）
- ② 過保護型（過度の世話を焼き、無意味と思われるほどの心配や不安を抱く）
- ③ 民主型（子どもの心身の発達や興味・要求などを理解し、愛情を持って理性的・合理的にしつける）
- ④ 過支配型（子どもへの指導が行き過ぎて、命令・禁止などが多く、子どもを強く服従させようとする。常に監督的）
- ⑤ 積極的拒否型（拒否型）（強制的に抑圧したり、過酷な要求を強要。子どもを邪魔者扱いしたり、保護養育の責任を放棄）
- ⑥ 消極的拒否型（放任型）（子どもの行動を無視したり、無関心であったり、放任）
- ⑦ 矛盾型（しつけに対する一定の方針がなく、同一の親が、その時々々の気分や健康状態などによって、子どもへの指導や接し方を変える）
- ⑧ 不一致型（家族の間で、子どもに対する指導や教育上の意見がくい違っている。子どもの同じ行為に対しても、家族によって叱ったり、放任したり、奨励したりする）⁽³²⁾

調査結果によると、一般的に民主型のしつけの反応が高く、過支配型、積極的拒否型、消極的拒否型、不一致型などは少なかった。大きく分けると、2～6歳児の子どものしつけは、民主型3

⁽³⁰⁾ 森『乳幼児の教育⑤ 子どもと家庭環境』、63頁。

⁽³¹⁾ 森『乳幼児の教育⑤ 子どもと家庭環境』、76頁。

⁽³²⁾ 松原達哉「基本的習慣のしつけタイプの研究」日本保育学会大会発表論文抄録、1971年、131～132頁。

分の1、過保護・甘やかし型3分の1、その他のしつけが3分の1となっており、それぞれのタイプに分かれているように見受けられる。

山下は、上に述べた松原の研究で提示されているそれぞれのしつけの型によって育てられた子どもが、どのような性格的・気質的特徴を備えていくのかについて、子どもの行動傾向をいくつかまとめている。①の甘やかし型（山下は「溺愛型」と命名）においては、「幼児的退行的傾向、わがまま、統制力の欠如、内弁けい、だらしなさ、無責任、忍耐力欠除、からいばり、早熟、無作法」などの傾向が目立っている。②の過保護型における行動傾向としては、「依頼心が強い、引込み思案、孤独、幼稚、独創性の欠如、責任感の欠如、集団生活への不適応、不器用」の傾向が見られる。④の過支配型（山下は「厳格型」と命名）における傾向としては、「表面的おとなしさ、自主性の欠如、ひとの顔色をうかがう傾向、かげひなた、劣等感、内向的傾向、反抗的行動」が認められる。⑤の拒否型における行動傾向として、「自分に注意をひくための目立つ行動、愛情を求める行動、攻撃的、反抗的行動、消極的逃避的行動、愛情に対する過敏傾向、発達の遅れ」などが見られる。さらに、⑦矛盾型においては「情緒不安、反社会的傾向、劣等感、反抗的傾向」などが見られ、⑧の不一致型においては「ひとの顔色をうかがう傾向、片親への甘え、異性化傾向（男の子が女らしく、女の子が男の子ようになる）、道徳判断の欠除」といった傾向が観察されている⁽³³⁾。親にとっては、これらの傾向をふまえながら、自分自身がどのしつけの型に属するのかをふまえた上で、それぞれのしつけのタイプに応じて親の態度を調整していくことが必要だといえるその取り組みによって、望ましい親子関係を構築していくことが可能になるといえよう。

同じような研究例として、手島らは幼児の家庭教育の内容に関する研究で、母親のしつけのタイプについて言及している。そこでは、被験者300人のうち、過保護型が55.3%、責任養育型が22.7%、自立推進型が20.3%となっていた⁽³⁴⁾。また地域としては、都市住宅地に自立推進型が多く、拡大家族に過保護型が多かった。

また、児玉の家庭のしつけの類型と子どもの性格型（Y-G検査による）についても以下のような結果が出ている。例えば、拒否型のしつけが生んだ性格型は、他の類型に比べて情緒不安定的（抑うつ的、気分が変わりやすい、劣等感大、神経質）で、内向的であり、民主型の家庭の子どもは情緒安定的で、協調的である⁽³⁵⁾。このように親のしつけの類型によって子どもの性格形成も大きな影響を受けることが分かる。また、自信のある児童は、しつけの一貫性があり、雰囲気の民主的な家庭の児童に多く見られたという研究結果もあり、子どもにとって環境要因が大きなファクターとなることが明らかとなった。山下の研究でも、民主的な訓育態度の家庭の子どもは協調的で、情緒安定性があることが示され、しつけの厳しい親の子どもは、競争心がなく、受動的で、人気がないという結果がでており、親の養育態度が子どもの性格に与える影響は大きい

⁽³³⁾ 山下『家庭教育』、144～145頁。

⁽³⁴⁾ 手島信雄、加藤千代司、雫石礼子、安藤貞雄「VIII-804 幼児の家庭教育の内容：岩手県における乳幼児の家庭教育に関する実態（その3）」日本保育学会発表論文抄録、1975年、253～254頁。

⁽³⁵⁾ 児玉省「日本のしつけと児童の性格形成の研究：人格形成の経験的基礎」教育心理学年報、1969年、67頁。

といえる⁽³⁶⁾。

家庭内の雰囲気の子どもに与える影響についてはいくつかの研究がある。例えば、家庭間に意見の不一致、トラブルが多く家庭内の雰囲気が険悪で淀んでいると、子どもの性格に大きな影響を与えるという研究結果もある⁽³⁷⁾。子どもに愛情が欠けていると、家庭への不適応感は強くなり、神経質的傾向も大きくなるという結果が出ており、家庭内の友好・明朗な雰囲気が子どもの健全な発達に不可欠であることを示唆しているといえる。

次に、しつけの一貫性の重要性についてふれたい。子どもの行為・行動に対して、叱ったりほめたりすることに関しては一貫性があることが必要であり、これについては先に述べた山下⁽³⁸⁾、森⁽³⁹⁾をはじめとし多くの研究者がしつけの一貫性を重視している。しつけの一貫性がないと、子どもが精神的に不安定になるだけではない。例えば同じことをしていても親のその時の気分や、そばに客がいるからなどといった理由で子どもへの接し方が変化するようでは、子どもにとって「何が正しくて、何が間違っているのか」という正しい道徳性を身につけることはできないであろう⁽⁴⁰⁾。また、家族内でも、母親が叱っているのに父親が擁護するなどといった両親の不一致も、度を過ぎると子どもの発達によくない。さらに、祖父母と両親の間の教育観の不一致も子どものしつけにとって大きな障害となるであろう⁽⁴¹⁾。特に祖父母は、孫に対して甘くなりがちであるが、子どもの将来を考えると、民主的な雰囲気のある家庭のなかにも、きちんとした規範・厳しさのあるしつけが必要であるといえる。

山下も子どもに対するしつけに関して、「指導の一貫性」をうたっている。指導の仕方にも、賞罰の与え方にもつねに一貫性ということが必要であると強調している。つまり、時間によるぶれもなく、また家庭内でも父母や祖父母によってのしつけの方向性に違いがなく、いわゆる「縦貫的にも横断的にも、一貫性の通ったものでなければならない」としている⁽⁴²⁾。これが欠けると問題のある子どもができやすいとしており、一貫性はすべての教育の要請する条件であるとまで強調している。

このように、家庭生活が子どもの成長・発達に及ぼす役割の大きさは、はかり知れないものがあるといえよう。古畑は、親の養育態度に関して、「何よりも親の豊かな深い愛情、適切な知的刺激に満ちた環境、情感のこもったきめ細かな相互作用・交流・相互報酬、基本的に暖かい受容的な姿勢、子どもの発達段階に応じた言動への承認・賞賛、子どもの不適切な逸脱行動に対しては、その限りでの制止・承認の除去など」が必要であると強調している⁽⁴³⁾。さらに、親のしつけの基準に一貫性があることが必要であると述べている。親自身に確固たる基準がなかったり、子

(36) 山下『家庭教育』、138頁。

(37) 町田恭三「家庭的諸条件の人格発達に及ぼす影響」文芸と思想、1960年、176～193頁。

(38) 山下『家庭教育』。

(39) 森『乳幼児の教育⑤ 子どもと家庭環境』。

(40) 田中敏隆『知と心の家庭教育—乳幼児に生きる力を培う—』中央法規出版、2000年。

(41) 藤永保『創造性教育』有斐閣、1972年。

(42) 山下『家庭教育』、122頁。

(43) 古畑和孝『人間性を育てる教育』慶應義塾大学出版会、1998年、256頁。

もへの接し方にも一貫性がなければ、子どもは落ち着きを感じることができず精神的に不安定になりやすい。同じことをしても、あるときはほめられ、あるときは叱られるというのでは、子どもはどうすればよいか分からなくなるであろう。また、親が子どもの行動基準を厳しく設定するあまり、何をしても認めず否定するばかりでは、子どもは無気力感を学習し、自己不全感にさいなまれ、健全な自己肯定感を育むことは不可能になる。このように親から無視されたり、拒否された経験を積み重ねていくと、「受け入れられたい」という願いが通じず、子ども自身も冷淡で冷酷な人間になっていきやすいといえる。

逆に、親の育児基準が甘く、過度に子どもを溺愛し、何をしても許す、かわってやってあげるといったようなしつけをしているとどうなるか。子どもは、欲求の充足の仕方を学ぶことができず、自立的な思考・行動を身につけることが困難になり、何でもすぐ人に頼ってしまうような依存性の強い人間になってしまうであろう。このように、親の過保護・過干渉は、ストレス耐性の弱い、がんばりのきかないひ弱な人間を生み出しやすいのである。では、子どもが何をしても構わずに、親が好き勝手放題に「放任」させておけばどうなるか。子どもは、年齢と共に習得していくべき自己抑制、自己制御といった能力を学習していくことができず、気に入らないことがあればすぐに逸脱行動に走るなどといった、我慢のきかない人間になるおそれがある。しつけひとつをとっても、子どもを「甘やかす」のではなく、「受け入れる」ことの難しさ、また「小言」を言うのではなく、きちんと「叱る」ことの難しさをきちんとふまえ、親は子に接するべきであろう。

上記に記したように、親の姿勢や働きかけ次第で、子どもはどのようにでも育ってしまうのであり、親自身が子どもの何にもまさるモデルであるといえよう。親が何に価値を置き、何を尊重しているか。例えば、物質的豊かさにはばかり目を奪われていると、経済的価値が第一となり、情動的・芸術的な価値を認めたり、慈しんだりする心は到底養われないであろう。音楽・美術をはじめとした芸術にも目を向け、自然の風物に親しみ、宇宙に思いをはせ、この世界をとりまく全知を超えた存在に畏敬の念を抱くこと、生命の尊さを実感することなどは、どれも豊かな人間性を育む基礎となるといえる。学校教育にすべてを委ねるのではなく、その以前の段階である家庭教育において、子どもの心の基底部分をしっかりと親が責任を持って育てていくことが肝要であり、それが家庭の果たすべき役割であるともいえよう。

2. 池田大作の家庭教育観—婦人雑誌の寄稿記事を中心に

前章までは、一般的な家庭教育・幼児教育に関する研究をみてきたが、次に池田自身の家庭教育観について考察していきたい。

今回は、1965～1988年までの、主に「婦人倶楽部（講談社）」「主婦の友（講談社）」「主婦と生活（主婦と生活社）」「婦人生活（婦人生活社）」などの婦人雑誌に掲載された池田の寄稿記事を追ってみた。特にその時期は、池田自身が家庭を持ち、子育てをしている期間と重なるのか、家庭教育に関する記事が多い。女性はいかに生きるべきか、母として、妻として、望ましい家庭を築

くべくどのような努力が必要なのか、池田は簡潔な言葉でわかりやすく読者に語っている。今回は、それらの寄稿記事のなかで一貫して池田が主張していることを以下の5点にまとめてみることにする。前章でとりあげた家庭教育や幼児教育に関する研究との関連についてもふれていきたい。

① 人間主義・人間教育とは

家庭教育について論じる前に、まず池田が「教育」をどのように考えていたかについてみたい。池田は、教育の根本は、一人前の人間、つまり一人の自立した人間を育てることが目的であるという前提をふまえた上で、家庭教育の重要さは、人間教育という点にあると指摘している⁽⁴⁴⁾。それは、家庭という場が、知識や技術の鍛錬以前の生活の基盤であり、子どもの精神的・肉体的発達の基盤であることから明白であるといえよう。つまり、人生の目的も教育の目的も同じと考えれば、どこに軸を置くかが重要になってくる。池田は教育も一個の人格である「人間完成」を目指して進むべきであり、この一点に心を定めた時に、一切の労苦が実を結ぶことになるとしている⁽⁴⁵⁾。また、池田は「教育があって、はじめて人間は『人間』になれる。その『人間』が社会を、国家をつくる。ゆえに『教育』こそ根本なのです」と教育の重要性を訴えている⁽⁴⁶⁾。家庭教育に置き換えてみると、夫も妻も、家族の一員として、どこまでも人間として一つの完成を目指して成長していくことが根本であるということではないだろうか。この池田の「人間教育」という言葉を前面に打ち出すという姿勢は既存の教育に関する研究にはあまり見られないものとはいえ、そこには彼のすべての基盤は「人間」を中心にして生まれ、発展するべきであるという人間尊重の精神の表れているといえるのではないだろうか。

池田は、妻として、また母としての生き方の基盤に「人間として生きる」という点を忘れてはならないとしている。人間的な「よさ」、例えば、思いやりとか、誠実さ、きちんとした折り目の正しさや前向きな姿勢、成長・向上への志向性などは、人間としての絶えざる成長を導く。そのような特性を生かしながら、その人の可能性を最大限に開花させる生き方、つまりそれが「人間として、人間らしく生きる」ことなのではないかと提案している。さらに、そのなかで、女性は人間として生きることの尊さを各家庭において実現していくべきであると池田は説いている⁽⁴⁷⁾。

② 妻としての生き方

次に、「妻としての生き方」についてみていきたい。今回参照した多くの家庭教育に関する書物を見ても、「母」という役割についての研究や言及は多く見られるが、「妻」という役割に特化した論点はあまり多く見受けることができなかった。だが、池田は妻としてのあり方、夫への接し

⁽⁴⁴⁾ 池田大作「わが家の教育方針 三人の息子と私」『微笑』昭和46年5月22日号所収、小学館、1971年。

⁽⁴⁵⁾ 池田大作「我が一家を「勝利チーム」に 働く妻へのメッセージ」『主婦の友』昭和63年1月号所収、講談社、1988年、240頁。

⁽⁴⁶⁾ 池田大作・V. A. サドーヴィニチィ『学は光—文明と教育の未来を語る』潮出版社、2004年、19頁。

⁽⁴⁷⁾ 池田大作「現代妻の生きがい論（第3回）人間として生きる」『主婦と生活』昭和46年5月号所収、主婦と生活社、1971年。

方、よりよい夫婦関係にあり方について、以下に紹介するように多くの寄稿記事で見解を述べている。その意味でも、ともすれば「母子関係」や「母」という側面ばかりが注目されがちな家庭教育の領域において、「妻」という存在や役割に一つの価値を置き、その重要性について言及したという点において、池田は独自の観点を持っていたといえるのではないか。

池田は、「家庭と社会は相似形である」という言葉を用いて、家族というものは、社会を構成する一細胞であり、そこに主婦である女性の裁量が任される部分が大きいと述べている⁽⁴⁸⁾。この観点は、前章でふれた森の「家庭そのものが一つの小さな社会であり、その生活は、小社会生活とみることができます」⁽⁴⁹⁾という視点と一致しており、家庭を単なる父、母、子どもという異なった成員から成り立つ集団というよりは、互いに協力し合い、助け合うことが基本の一つの小社会ととらえるという観点において、両者の間には共通点が見られるといえる。

この「賢明な主婦への希い」という寄稿記事では、女性に対して「賢明な妻であれ」という一点が強調されている⁽⁵⁰⁾。この点は、いくつかの寄稿記事で池田が主張していることでもあるが、女性が色々な知恵を働かせて夫に対してふるまうことが円満な家庭生活を築くことにつながるといことであろう。たとえば、妻が信頼と尊敬を持って主人に接すれば、おのずから家庭には平和と調和が訪れる。これは、男性に見られがちな権力欲、名誉欲など攻撃的な欲望に対し、女性は自身の内面にむしろ平和主義的な優しさ、母性といったものを内在させているので、そのような特質をもっと生かしていけば協動的で思いやりのある家庭を築くことができるという観点であるといえよう。

池田は、女性として、妻として、母として、仕事、家事、育児を受け持つ苦勞をさして「一人三役」という言葉で表現している。一人で多くの役割をこなすことは苦勞も多いには違いないが、創造的知恵を働かせていくべきであると述べている⁽⁵¹⁾。また、妻は、人生の伴侶であると同時に、良き友人であるべきであると訴えている。自身の体験からも、互いに困ったことがあれば助け合うべき存在であり、悩んでいる時には励ましあい、嬉しい時には共に喜ぶ、夫にとって妻はそうあらねばならないであろうし、妻にとっての夫もそうであろうと述べている⁽⁵²⁾。このように、互いを補い合って、揺るぎない信頼のもとに、共に前へと前進していくところに、夫婦の価値はあると説いているのである。

次に、夫婦のあり方についてであるが、池田は家庭の基盤は愛情にあると述べたうえで、サン・テクジュベリの「愛する—それはおたがいに見つめあうことではなくて、一緒に、同じ方向を見つめることである」⁽⁵³⁾という言葉をはきながら、夫婦は「共に新しい人生の目標に向かって進む

(48) 池田大作「賢明な主婦への希い」『婦人倶楽部』昭和40年10月号所収、講談社、1965年、198頁。

(49) 森『乳幼児の教育⑤ 子どもと家庭環境』、62頁。

(50) 池田「賢明な主婦への希い」。

(51) 池田大作「自立した主婦像を目指して」『婦人生活』昭和50年1月号所収、婦人生活社、1975年。

(52) 池田大作「妻は人生の伴侶であると同時に良き友人なのです」『婦人生活』昭和52年1月号所収、婦人生活社、1977年、230頁。

(53) 池田大作「家庭革命のすすめ」『婦人倶楽部』昭和40年9月号所収、講談社、1965年、194頁。

共同の主体者であり、建設者である」⁽⁵⁴⁾と強調している。つまり、お互いに向き合うのではなく、同じ目標に向かって、共に励ましあいながら進んでいくことが重要であると述べている。また、夫婦は、真のパートナーシップを築くために、男性と女性の特性を最大限に生かしながら、お互いの人格を尊重しあっていくことが必要であるとしている。このように、池田の夫婦の間の愛情と信頼関係が大事であるという主張⁽⁵⁵⁾は、前章の木下の「家庭教育は家庭生活とは別にあるのではなく、家庭生活そのものが家庭教育機能を発揮するものである」⁽⁵⁶⁾という言葉と相通ずる部分があるといえよう。つまり、お互いを尊重する人間関係を前提にした家庭生活そのものに価値を置き、すでにそこに家庭教育が生まれるのであるという発想に立っているという点で、池田と木下の間には大きな一致が見られるといえる。

家庭生活は、そこに住む人の人間性や心によって決まるという。ゆえに、池田は、家庭生活を豊かにするために最も必要なことは、夫と妻の「人間的向上への絶えざる努力」であると述べている。夫は、社会において職場での自己研鑽を行っているが、ともすれば妻は、家庭のなかだけに生きることになりがちである。だが、妻も自信の確固たる人格を自覚し、家庭の真の主体者として自己の成長への努力を怠るべきではないと訴えている⁽⁵⁷⁾。また、家庭の教育力は、両親がいかに関心として成長し続けているかにもいえる。まさしく、「子育て」は「自分育て」ともいえ、子育てを通して、親が自らを向上させていったときに、家族の絆も深まり、安定していくといえる。

池田は、夫婦円満の秘訣として、「感謝」する心と「共通の目標」をあげている⁽⁵⁸⁾。夫婦は最初は他人同士であるが、年月を経ていくうちに、共に人生を生き抜いていくという「共同体」としての自覚が芽生え、二人の間の「責任」と「信頼」と「励ましあい」が自然のうちに、互いを結ぶ絆になっていくのではないかと述べている。こうした「家庭も一つの生命体である」という観点に立つところに、夫婦が共通の目的のもとに成長していくことができ、それを池田は「成長家族」と名づけている。

また、池田は、ことあるごとに「社会に開かれた家庭」をと、呼びかけている⁽⁵⁹⁾。これは、子どもの独創性や創造力を伸ばし、人との協調性や思いやりの心などの社会性、また平等の意識、他者への寛容の精神、平和への志向性などの基本的倫理観を育むことは、家庭の中だけにこもるのではなく、常に社会とのつながりを意識し続けることではじめて可能になるということを示唆しているのではなかろうか。彼は、女性は、家庭を籠城の場とするのではなく、社会に開かれた

⁽⁵⁴⁾ 池田大作「新時代に生きる女性のために（第1回）妻の幸福について」『主婦と生活』昭和44年8月号所収、主婦と生活社、1969年、202頁。

⁽⁵⁵⁾ 池田「妻は人生の伴侶であると同時に良き友人なのです」。

⁽⁵⁶⁾ 木下「家庭教育を考える」、73頁。

⁽⁵⁷⁾ 池田大作「新家庭論 愛情と理解を深める対話とは」『女性セブン』昭和50年1月15日号所収、小学館、1975年、68頁。

⁽⁵⁸⁾ 池田大作「美しき人—それは美を見つける名人—女性の“美しさ”とは何か!？」『主婦と生活』平成2年1月号所収、主婦と生活社、1990年、260頁。

⁽⁵⁹⁾ 池田大作「若い母に語る—その新しい家庭教育の姿—」『主婦の友』昭和43年6月号所収、講談社、1968年。

広場としていくには、主婦の意識革命が必要だとし、それが真の女性解放につながるとの見解を示している⁽⁶⁰⁾。さらに、女性は職業に限らず、社会に役立つ運動に参加し、社会的な連帯の中で人間的な成長をしていくことが望ましいと、婦人に社会との接点を持ち、社会的意識を持つように呼びかけている⁽⁶¹⁾。

また、家庭環境というものは、住む人の知恵や心によっていかようにも変わるということから、「家庭のヘゲモニー（指導権）は主婦の掌中にある」と述べ、家庭を幸福にするのも不幸にするのも一家の妻であり、母である主婦にかかっていると強調している⁽⁶²⁾。特に女性は家計簿をつけるなど、きちんと計画性と経済観念を身につけ、生活の上でも知恵を働かせることが大切であると述べている⁽⁶³⁾。

次に紹介するのは、池田独自の観点の一つとも言える、「家庭生活」といういとなみ自体をも価値創造ととらえる視点である。池田は、生活というものは常に創造であると主張し、家庭経済の考え方も、消費に終始するのではなく、創造のための活力を生み出すものでなければならないと述べている⁽⁶⁴⁾。家庭経済だけではなく、家庭における幸福も生活の創造の中から生まれてくるのだといえよう。毎日の単調な生活の中でどこまでも創意工夫をこらしていくこと自体が、主婦の賢明さであり、素晴らしさであると訴えている⁽⁶⁵⁾。さらに、「創造家庭」「創造家族」ということばをひきながら、創造的生命を輝かせて家族全員が協調し、未来をひらいていくことの大切さをといている。なかでも、主婦が率先して創造的な知恵を働かせることが大切であると述べている⁽⁶⁶⁾。例えば、夫との間には心からの信頼関係を結び、子どもとの間には愛情と尊敬の交換を、兄弟間には協調の心を育む努力をすることも家庭での価値創造となるであろう。

このように、家庭の主婦、特に社会で働くことのない専業主婦の女性や、生きる希望ややりがいをもどくように見出せばいいのか迷う女性に、池田は「人生の尊さは生きる価値を探そうとする姿勢の中にある」と訴える⁽⁶⁷⁾。毎日の生活に流されるのではなく、常に新しい価値を創造しようとする姿が大切なのであると説く視点は、池田ならではの女性に対する家庭観を示していると

⁽⁶⁰⁾ 池田大作「あなたへの提言 「開かれた家庭」への一歩は対話から」『主婦の友』昭和51年1月号、講談社、1976年。

⁽⁶¹⁾ 池田大作「私の家族観—家庭革命をめぐって」『婦人生活』昭和43年3月号所収、婦人生活社、1968年；池田大作「現代妻の生きがい論（第3回）人間として生きる」『主婦と生活』昭和46年5月号所収、主婦と生活社、1971年；池田大作「この不安と動揺の時代—あなたがよりよく生きるための提言」『主婦と生活』昭和47年1月号所収、主婦と生活社、1972年。

⁽⁶²⁾ 池田大作「主婦の知恵で築く新しい家庭像」『婦人倶楽部』昭和41年7月号所収、講談社、1966年、221頁。

⁽⁶³⁾ 池田大作「女性こそ生活に知恵を」『婦人倶楽部』昭和40年12月号所収、講談社、1965年、229頁。

⁽⁶⁴⁾ 池田大作「ダイジェスト「家庭革命」前編—どのような家庭をつくるべきか」『ヤングレディ』昭和41年10月3日号所収、講談社、1966年、94頁。

⁽⁶⁵⁾ 池田大作「妻の生きがい」『主婦の友』昭和47年1月号所収、講談社、1972年。

⁽⁶⁶⁾ 池田大作「家庭は、社会の永遠の学校である」『主婦と生活』昭和50年1月号所収、主婦と生活社、1975年。

⁽⁶⁷⁾ 池田大作「—若い母へ贈る— 人生の尊さは生きる価値を探そうとする姿勢の中にあります」『婦人生活』昭和54年1月号所収、婦人生活社、1979年。

いえよう。

価値創造というキーワードを人間関係に置き換えてみると、家庭は人格創造の場であるということがいえる。池田は家庭の役割とは、日々、心を豊かにし、家族一人一人の結びつきによって人格を磨き、向上していく「人格創造の場」であると説いている⁽⁶⁸⁾。こうして、互いに慈しめ合い、思いやりながら、人間同士の絆を深め、共に前に進みゆく家庭のことを「成長家族」と名づけながら、その中心にいるべき妻であり母である女性は、どこまでも聡明で、賢明であるべきであると訴えている。

③ 母としての生き方

次に、母としての生き方に関する池田の主張をまとめてみた。池田は、数々の婦人雑誌において、妻であり、また母である女性に様々な視点からメッセージを送っている。その論点的確さは、一般の育児書、また幼児教育、発達心理学に関する専門書にも通じていたことが伺えるような具体的なアドバイスであり、指摘であるといえる。ここでは母としての子供への接し方、母子関係の重要性、愛情と信頼関係の構築についてなどの論点を紹介する。

池田は、家庭における母は、太陽のごとき明るさと、にこやかさ、そして前向きの強さを持つべきであり、その母の姿を見て子どもは豊かに育っていくのだと述べている⁽⁶⁹⁾。家族も、人間が集まってできる以上、一つの社会ともいえ、そのなかでも妻であり母である女性の無償の愛情、慈悲といったものが家庭生活の基調となり、それがあからこそ、夫も子どもも家庭へと立ち返っていくことができるとし、その意味でも女性の家庭における役割は非常に重大であると池田は強調する⁽⁷⁰⁾。子どもはいつも親を見ている。池田は、子どもは母の「明朗さ」「向上心」「思いやり」「聡明さ」「信頼」「樂觀主義の強さ」など、さまざまな特性を、大人が思っている以上に敏感にとらえていると述べている⁽⁷¹⁾。この点は、前章の森⁽⁷²⁾や山下⁽⁷³⁾らに見られる母親の子どもに与える言葉や愛情の重要性についての見解と、特に、親子の信頼関係が家庭の基盤として必要であるという点で一致しており、池田と多くの幼児教育書との間に共通点が見出せる。

平和学者・社会学者であるエリス・ボールディング氏は、池田との対談の中で、自らの母について述べている。「私の母も、年老いた人たちへの思いやりが、とても深い人でした。(中略)このようにして、人々を幸せにすることが私たちの責務であることを、母は私の心に深く刻んでくれました。母が自然を愛し、人々を大切にし、正義を尊び、音楽を愛したことが、私に計り知

⁽⁶⁸⁾ 池田大作「成長家族のすすめ—いま“家族の絆”とは」『主婦の友』昭和62年1月号所収、1987年、252頁。

⁽⁶⁹⁾ 池田大作「教育革命(1) 教育における母親の役割」『ウーマン』昭和49年3月号所収、講談社、1974年、125頁。

⁽⁷⁰⁾ 池田「新家庭論 愛情と理解を深める対話とは」。

⁽⁷¹⁾ 池田大作「忘れ得ぬバッキンガム宮殿訪問 「開かれた心」の国際人・アン王女との語らい」『主婦と生活』平成4年1月号所収、主婦と生活社、1992年。

⁽⁷²⁾ 森『乳幼児の教育⑤ 子どもと家庭環境』。

⁽⁷³⁾ 山下『家庭教育』。

れない影響を与えています」⁽⁷⁴⁾ このボールディング氏の言葉からも、母親の信念、行動すべてが子どもに伝わっていく様子がわかり、家庭教育における母親の役割の重要性をみてとることができるであろう。

池田は、幼児の発達にとっての家庭、なかんずく母親の重要性を何度も訴えている。彼は幼児期の大半を過ごす家庭こそが、子どもの人間性を育てる最初にして最高の場であると強調している。子どもが温かい人間愛の精神を深め、人への感謝と思いやりの心を育む原点は、他ならぬ家庭にこそある。そして、家庭における母親の言葉、行動、心理が幼児の生命に与える影響ははかり知れないとしている。子どもにとって最も身近な母親の人格、人間性は、子どもの無垢な心に投影され、ゆっくりと子どもの人格の基盤を形成していく。つまり、母親の人間としての姿勢自体が、子どもの人間的成長という最も根幹の問題に直接関わってくるということである。その意味で、母親は子どもにとって一番身近な手本であり、大きな責任を持っていることは論を俟たない。池田は、家庭は、「子どもたちにとっての憩いの場」であり、「豊かな人間性を育てる土壌」「明るく果てしない、子供たちの夢の温床」でなければならないと強調している⁽⁷⁵⁾。そのためにも、母親が愛情を持って子どもに接すること、子どもの人格を尊重することが必要といえるであろう。前章の高垣の自己肯定感に関する研究では、幼児期に家庭において揺るぎない「自己信頼感・自己肯定感」を育むことの重要性が説かれている⁽⁷⁶⁾。池田も識者との対談から、初等教育の目的として「子どもに自信を与えることが大事である」と述べ、「人間の基礎」を身につける家庭こそが重要であるとしており⁽⁷⁷⁾、その点でも高垣との観点の一致をみることができる。

池田は、教育、特に人間教育の主体をなすものとして「感化」という言葉を用いている。単なる知識の伝達や肉体の訓練だけでは十分でなく、家庭内の環境、親の人格や姿勢そのものによって、子どもは「感化」されることを認識すべきであると主張している⁽⁷⁸⁾。

また、子どもは本来「伸びよう」「成長しよう」という生命の勢いを持っている。こういった、子どもの生命力を正しく導き、子ども自身が自由な伸びのびとした空気を呼吸できるような生活の場を絶えず配慮してやることも忘れてはならないであろう。子どもがより人格を磨き、将来自分の使命を果たせるような力をつけることのできる適切な教育環境を整えてやることも親の責任であり、社会の役目であると池田は主張する⁽⁷⁹⁾。親自身も、子育てを負担というよりは喜びであるとしてとらえて、子育てを楽しみながらおおらかに子どもの成長を見守るという姿勢が大切であるといえよう。

池田は、教育という営みに関して、単に知識を教え込むという面だけではなく、その知識を活

⁽⁷⁴⁾ 池田大作・エリス・ボールディング 『「平和の文化」の輝く世紀へ!』潮出版社、2006年、26頁。

⁽⁷⁵⁾ 池田大作「新しい結婚2 子供をどう教育するか」『マイライフ』昭和45年9月号所収、グラフ社、1970年、52頁。

⁽⁷⁶⁾ 高垣『生きることと自己肯定感』。

⁽⁷⁷⁾ 池田大作『「人格」こそ子に贈る最高の財産 太陽を向いて生きる『成長家族』として』『主婦の友』平成5年1月号所収、講談社、1993年。

⁽⁷⁸⁾ 池田「新しい結婚2 子供をどう教育するか」。

⁽⁷⁹⁾ 池田大作「育てよう「大いなる未完成」」『主婦と生活』昭和63年1月号所収、主婦と生活社、1988年。

用して人生を豊かに、また悠々と生き抜いていける「知恵」を薫発していく側面をも重視している⁽⁸⁰⁾。いくら知識があっても、貧しい守銭奴のような心根では人生を豊かに生きていくことはできない。要はいい心でなければいい人生は送れないということである。自分自身の心の世界を、どのように満ち足りた豊かさややさしさで飾っていくか、そのために「知恵」や「教養」を身につけることが必要なのである。その意味で、家庭においては、知識の習得よりもむしろ、「人間として生きるために必要な知恵」を育むという視点が重みを増してくるといえよう。

池田は、いくつもの家庭を見てきている自身の経験を通して、素晴らしい家庭の持つ共通点として以下の3点をあげている。1点目は、日常生活において、家族全員が何か一つの目標に向かって励まし合い、前に進んでいることであり、2点目は、毎日の生活の中で、あいさつや約束を守るなどの人間としての基本的なルールがきちんと教えられていること。3点目として、親がそれぞれの子どもを、立派な独立した人格として尊重し、信頼しているということがあげられている⁽⁸¹⁾。これらの要素は、前に述べてきた子育てについての池田の教育観と一致するものといえよう。

池田は、母親の子どもに対する影響の大きさと重大さを強調したうえで、「母親は、子どもに対し、その愛情を通じて、人間の尊さ、生き方を教えてやらねばならない」と訴えている⁽⁸²⁾。母親は、子どもを、一個の生命として尊重し、かけがえのないものとして大切に慈しむ心を忘れてはならないし、この崇高な母性を家庭教育において生かしていくことが必要である。その意味で、母親は、どこまでも子どもにとって絶対の信頼と安心の対象であり、家庭自体が豊かな人間性を育む人間教育の最高の場であるといえよう。

池田は、子育てに関して欧米と日本の親子関係の比較を試みている。彼は、日本の親子関係の特徴として深い情愛をあげ、欧米の社会と比較して日本人の家族意識は親と子の関係を軸に形成されてきたとしている。わが子をどこまでもそのまま受け入れ、全人格を肯定する、開かれた愛情で接していくことの大切さ、また「子どもを信ずる親は親を信ずる子を育てる」という言葉に見られるように、親子相互の信頼関係が何より重要であると述べている⁽⁸³⁾。また、「教育の目的は子どもの人間性を引き出すことにある」という観点からみると、教育する側が確固たる信念や主義を見失ってはならないといえる。これは家庭における家風であり、家庭の流儀、雰囲気のようなものであるといえる。このように、価値の多様化する時代であるからこそ、親が教育に関して揺るぎない確信、またしつけの一貫性をもって子供に接することが肝要であるといえよう。このしつけの一貫性については、前章の山下⁽⁸⁴⁾、森⁽⁸⁵⁾、田中⁽⁸⁶⁾、藤永⁽⁸⁷⁾らの研究においても

⁽⁸⁰⁾ 池田大作「人間性豊かな子供に育てるために」『主婦と生活』昭和62年1月号所収、主婦と生活社、1987年。

⁽⁸¹⁾ 池田大作「失われた家庭教育を求めて」『主婦の友』昭和60年1月号所収、講談社、1985年、314頁。

⁽⁸²⁾ 池田「若い母に語る—その新しい家庭教育の姿—」、204頁。

⁽⁸³⁾ 池田大作「信じ合える親子であるために」『主婦と生活』昭和54年1月号所収、主婦と生活社、1979年、255頁。

⁽⁸⁴⁾ 山下『家庭教育』。

⁽⁸⁵⁾ 森『乳幼児の教育⑤ 子どもと家庭環境』。

強調されている。池田も、しつけの一貫性を重視しており、教育する側が確固たる理念をもち、教育にあたることが肝要だとしている。

池田は、子どもを信ずるとともに、子どもの人格を尊重することの大切さについてもふれている。「子どもの人格を尊重する家庭教育を」という寄稿記事で、子どもがよくなるのも、悪くなるのも、結局は親の責任であり、それは子どもに対してだけではない、社会に対する責任でもあると述べている。それは、子どもは両親の子どもであると同時に社会の子であるという認識、つまり社会的な存在、「社会の未来の担い手」として育てられる必要があるということだといえよう。その家庭生活の中において親と子、夫と妻が互いの人間性を尊重することが、家庭の団欒を育む大きな原動力となることを池田は強調している⁽⁸⁸⁾。また、どんな子どもにも、極めて幼い心と、一方で驚くほどの大人の自覚が育っているものである。「子どもを一個の人格として尊重できる親こそ、立派な家庭人といわなくてはならない」という言葉にあるように、たとえ幼くとも親には子どもを心から尊敬する一念を持つ必要があるといえよう⁽⁸⁹⁾。

④ 父親のあり方

池田は、「新しい父親のあり方」という寄稿記事で、「父親の“権威”とは、家族に経済的恩恵を与えることではなく、精神的な面にこそ求められるべきである」と主張している⁽⁹⁰⁾。彼は、子どもの健全な生命の発育には、父親の役割が不可欠であると述べている。そして、母が子どもの情緒、感情面での教育を担当するとすれば、父は社会とのパイプ役となり、人格形成における社会的側面を引き受けるべきであると説いている。例えば、父は人生の知恵、また社会における政治、経済、文化の動きなどの世の中の知識を子どもに授けることができ、自身の「豊富な人生経験をもとに、子供の知識をくみあげながら、社会観、人生観、教育観、人間らしい生き方などを説き示す」ことができるとしている⁽⁹¹⁾。さらに、父と母のわが子を思う愛と責任が一体となってはじめて家庭教育が見事に開花していくと述べている⁽⁹²⁾。このように、母親の慈愛が必要であることはもちろん、父の教育も不可欠であり、決して母親に教育をすべてまかせて、無責任な態度をとるべきではないと述べている。このように、父親は、子どもにとっての精神的なよりどころとなり、社会における生き方、人間としてのあり方などを示すべきであるという主張は、前章のしつけにおける父親の役割に関する研究⁽⁹³⁾とも一致する点がみられ、基本的しつけを超えた子どもにとっての大きな世界観や社会観の育成にたずさわる父親の重要性について両者の間

⁽⁸⁶⁾ 田中『知と心の家庭教育—乳幼児に生きる力を培う—』。

⁽⁸⁷⁾ 藤永『創造性教育』。

⁽⁸⁸⁾ 池田大作「子どもの人格を尊重する家庭教育を」『婦人倶楽部』昭和40年11月号所収、講談社、1965年。

⁽⁸⁹⁾ 池田「子どもの人格を尊重する家庭教育を」、215頁。

⁽⁹⁰⁾ 池田大作「新しい父親のあり方」『主婦と生活』昭和48年1月号所収、主婦と生活社、1973年、298頁。

⁽⁹¹⁾ 池田大作「教育革命（2）教育における父親の役割」『ウーマン』昭和49年4月号所収、講談社、1974年、112頁。

⁽⁹²⁾ 池田「教育革命（1）教育における母親の役割」。

⁽⁹³⁾ 桂、長島、真仁田、原野編『母親の役割 家庭教育選集第4巻』。

には共通点を見出すことができるといえる。

池田はヘイゼル・ヘンダーソン氏との対談において、お互いの両親についてふれている。池田は、自らの親について「父の生き方からは、『信念を曲げない生き方』を、母からは『どんな逆境にも負けない明るさ』を、教わった気がします」と語っている⁽⁹⁴⁾。これは、父性の強さ、たくましさであり、母性の明るさや優しさという、父母それぞれの持つ特性を現わしているといえよう。

池田は、父母の担うべき教育的な役割の違いについても言及している。彼は、日常的なしつけの問題は母親が厳しくも暖かいまごしで子どもに接するとしても、人間としての生き方の根本に関わるような問題については、父親が厳然と子どもをさとし、導いていくことが必要であると述べている⁽⁹⁵⁾。何が人間として大事なことか、また何が人生において基本的なことか、そうした人間としてあるべきものの見方、考え方、姿勢については、まず父親自らが賢明さをもって子どもに正しき道を教えていくべきであるといえよう。このように、人生に対する毅然とした態度と、大きい心で子どもを受け入れる包容力、この二つが父親にとって必要ではないかと池田は強調している。

池田ならではのユニークな視点として、父親のあり方、また父と母の子どもへの接し方の違いについてあげることができる。父と母の子どもへの接し方の違いに関して、池田は以下のように述べている。例えば、叱り方ひとつとっても、母はそれが厳しいものであっても、子どもへの絶対的な愛情がある限り、どんなに叱ってもいいが、父が口うるさくあまり怒ると子どもは離れていってしまう。父親は基本的に子どもを甘やかすのがよく、母親はときには厳しく叱ることが必要であるとしており、この主張は他の寄稿記事にも見られた⁽⁹⁶⁾。つまり、「母は愛情がある限りどんなに厳しく叱ってもよいが、父がやかましく怒ると子どもは萎縮してしまう」ということであろう。子どもを心底叱りつけるときでも、ふとその子をいとおしく思ったり、叱る自分を哀しく思う気持ちがあれば、その思いは必ず相手に通ずるものである。「子供にとって栄養のように大事なものは、両親の愛情であり、時に良薬のような苦さをもった厳しさと、無限の抱擁力をもった理解が、子供を大きく逞しく育てるのだ」⁽⁹⁷⁾「つきない愛情があるならば、どんなにやかましい母親の小言も、子供の心には必ず通ずるにきまっている」⁽⁹⁸⁾とあるように、池田は母親に関しては、時には厳しくあることを求めている。

これは、池田の恩師である戸田城聖のことは「子供の教育は、女親に任せようがよい。子供は、母親からはどんなに厳しく叱られても、ひねくれないが、父親がうるさくいうと、必ず、成長を曲げてしまう」から来ているともいえよう。池田は、この教訓を自らの家庭教育においても

⁽⁹⁴⁾ 池田大作・ヘイゼル・ヘンダーソン『地球対談 輝く女性の世紀へ』主婦の友社、2003年、18頁。

⁽⁹⁵⁾ 池田「新しい父親のあり方」。

⁽⁹⁶⁾ 池田大作「新時代に生きる女性のために（第2回）母親の使命について」『主婦と生活』昭和44年9月号所収、主婦と生活社、1969年；池田大作「この不安と動揺の時代—あなたがよりよく生きるための提言」『主婦と生活』昭和47年1月号所収、主婦と生活社、1972年。

⁽⁹⁷⁾ 池田「子どもの人格を尊重する家庭教育を」、214頁。

⁽⁹⁸⁾ 池田「子どもの人格を尊重する家庭教育を」、215頁。

実践してきたという⁽⁹⁹⁾。このように、父親と母親の役割にはおのずと区別があり、子どもへの接し方も配慮すべきであるということであろう。

また、父親の仕事について、池田は、たとえどのような職業であろうと、父親の仕事に打ち込む真摯な姿と、そこからにじみ出る知恵の数々は子どもにとって尊敬の対象であり、畏敬的となることを述べている⁽¹⁰⁰⁾。男の本領は仕事である。このような父親の社会に貢献しようとする姿、信念は、必ず子どもの生命に焼きついていくであろうし、父親も子どもとの対話を軸にして、父親の座を毅然と確保することが必要である。そして、妻も一家の柱である夫＝父親を尊敬することが、人間として当然のあるべき心であることを教えることも必要であろう。ともすれば、父親の家庭での立場は弱くなりがちであり、「父権不在」、「父親の権威の喪失」といったことばもささやかれるなかで、このように、父親のいい意味での権威を印象づける努力を怠るべきではないと、池田は主張する⁽¹⁰¹⁾。

また、池田は仏法では賢明な父親の行為をさして慈父と名づけるということばをひきながら、子どもたちは、父親を通して、古今東西の人間の生き方、地球の諸問題、社会の諸相などを幼いながらも吸収し、自発的な思考や自律的な実行力を伸ばしていくのだと強調している⁽¹⁰²⁾。そして、夫婦が互いに尊敬しあい、その姿を子どもに見せること、母親が子どもに自分の姿を通して父親を尊敬することを教え、父親は母親を大事にすることを教えることが最も大切であると強調している⁽¹⁰³⁾。

⑤ 生命の尊厳の尊重

最後に、池田の家庭教育に関する独自の観点として、私はこの「生命の尊厳の尊重」という点を強調したい。池田は、万物への愛、自然美への開眼、生を破壊する者への怒りなどといったことばをひきながら、子どもに「生命の尊厳」を教えることが大切であると主張している。これは基本的倫理観にたったものということができるが、それを日常生活の実践の所作にあてはめると、夫や子どもに対する思いやりといった他者に対する気遣い、慈しみなど道徳的な行動との関連を述べたものとして特筆すべき視点を提供したものとみることができる。

池田は、科学文明の発達や地球が抱える問題群を、人間性の喪失、なかんずく人間の生命の尊厳を見落としてしまったことが一因なのではないかと問題提起をしている⁽¹⁰⁴⁾。20世紀の歴史をふりかえてみると、人ひとりの生命の尊厳が無視されたことにより、痛ましい戦争をはじめと

⁽⁹⁹⁾ 池田大作「わが家の教育方針 三人の息子と私」『微笑』昭和46年5月22日号所収、小学館、1971年、93頁；池田大作「子を教育するに足る親かどうか」『婦人倶楽部』昭和52年1月号所収、講談社、1977年。

⁽¹⁰⁰⁾ 池田「教育革命（2）「教育における父親の役割」。

⁽¹⁰¹⁾ 池田大作「父親不在の家庭教育を憂える」『婦人倶楽部』昭和51年1月号所収、講談社、1976年。

⁽¹⁰²⁾ 池田大作「教育革命（3）知能教育より心の教育を」『ウーマン』昭和49年5月号所収、講談社、1974年。

⁽¹⁰³⁾ 池田「この不安と動揺の時代—あなたがよりよく生きるための提言」。

⁽¹⁰⁴⁾ 池田大作「わが子に託して 病苦、戦争、終末まで」『主婦の友』昭和49年1月号所収、講談社、1974年。

する諸問題が起こっているといえる。そこで、どこまでも「人間の幸福」の原点にかえり、生命の尊厳に発想の立脚点をおくことが、教育においても重要であると述べている。何のための教育であり、社会なのか。どこまでも、人間として人間自身の可能性を最大限に開花させ、自己を向上させ、自己に生ききっていくための教育であり、社会であるべきなのではないか。このように、生命尊重の精神を幼児教育の段階から重要視するという点に、池田独自の教育観があらわれているといえよう。

また、池田はカントの「静かに深く考えれば考えるほど、ますます常に新たに、そして高まりくる感嘆と畏敬の念をもって、心をみたまものが二つある。それは、わが上なる星空と、わが内なる道徳律である」ということばをひきながら、教育において自然や生命への畏敬の念を育むことの重要性について述べている⁽¹⁰⁵⁾。池田は、教育はこの生命そのものへの新鮮な憧憬や宇宙、生命、人間への敬いの心を軸にするべきであると述べ、物質主義、知識偏重の教育に流れるのではなく、人間の内なる精神的な価値に目を向けるべきであると主張している。

人間生命に関する池田の記述をみても、「かくも雄大にして壮麗な人間生命には、いかなる財宝、名声、権力をもってしてもあがなえない無限の価値が備わっています。思いつくままに挙げてみただけでも、創造への意欲と知性、思考する力、慈しみの情愛、真理を発見する洞察眼、正義感と良心、勇気にあふれた不屈の意志等々すべてのものが人間としての尊厳を示してあまりあるといえます」となっており、彼はこれら生命の特質に大きな価値を置いているといえる⁽¹⁰⁶⁾。

では、なぜ池田はそこまで「生命の尊厳の尊重」という一点を重視するのか。池田は自立的な人間になることと、他者との共生を実現できる力をつけること、また人生における価値を創造できることを強調している。それらを家庭教育において実現するために、子どもに「人間」としての可能性を最大限に花開かせていくために、どのような姿勢が必要かと考えると、自分の生命はもちろん他者の生命をも尊重し、生きとし生けるものすべての生命を尊重するという視点が見えてくる。これは仏法思想にも通じるものではないかと私は考える。仏法でいう「仏」とは、生命の内なる尊厳を意味する。一人一人の命には、無限の宝である善性、また尊き仏性というものが存在すると説く。仏法とはこの大宇宙である「外なる宇宙」と自らの生命である「内なる宇宙」との一体性と調和を探っていく思想形態であり、まさしく生命の尊厳の思想といえる。また、この万物一体の生命観の広がりから、自分をどう位置づけ、どう生きていくかという内省を促す思想でもある。

一般的な幼児教育書では「いのちの大切さ」を教えるということに関して、あくまでも基本的常識である「生き物に命があることを認識する」「いのちを大切にする」という言葉に見られるような日常的な道徳・倫理教育の一環としての「生命の尊重」という段階にとどまっているといえる⁽¹⁰⁷⁾。だが、池田の幼児教育観においては、随所に「親が子どもの生命を尊重する」「子どもも

⁽¹⁰⁵⁾ 池田大作「子供に教える“現代の勇氣”」『主婦と生活』昭和51年1月号所収、主婦と生活社、1976年、237頁。

⁽¹⁰⁶⁾ 池田大作「教育革命（1）教育における母親の役割」、123頁。

⁽¹⁰⁷⁾ 人間教育研究協議会・編『＜教育フォーラム 第32号＞ 心の教育の基礎・基本』金子書房、2003年；

成長の過程で、自然への畏敬の念、ならびに生命の尊厳を心身共に実感する」などの主張が出てくるように、子どもに身に付けさせるべき基礎的かつ重要な特性の一つとして、この「生命尊重」の理念が打ち出されていると読み取ることができる。

例えば、幼児でも四季折々の草花の美しさを感じ取ることができる。そこで、単に受身で受容するのではなく、積極的に反応する。草花を見るだけではなく、実際に花瓶に生けたり、自分から草花を栽培するといったようにである。また、天体観測などを通して、宇宙の中の自分を感じながら、万物を支える大宇宙の営みに畏敬の念を呼び起こしていくこともある。そのような自然とたわむれる活動を通して、自らの情感を豊かにしつつ、何よりも「いのちを育て、慈しむ心」を育てていくことが大切であろう。われわれは、この世界の生命のエネルギーを頂くことによって生かされているという観点に立った時に、自己の生存に心から感謝し、今あるいのちをかけがえのないものとして尊重しようとする姿勢が生まれてくるといえる。それが、ひいては、他人を思いやり、他者の幸せを喜べることにつながる—このような善の価値を内面化させることこそ、心の教育というのではないだろうか。

生命の尊さ、つまりすべては生命から始まり、生命を尊重することで自分だけではなく他者をも尊敬し、さらには共生の道を探っていく—そこには、「人間教育」の基本が脈打っているといえよう。他者を尊重するだけでなく、生きとし生けるすべての生命を尊ぶことから、自分自身をかけがえのないものとして認識することができ、この限りある人生を精一杯自らの生命を最大限に躍動させて可能性を開いていくこと、つまり価値創造の人生を志向していくことができる。このように、池田は生命尊重から価値創造への一連の思想の流れを家庭教育にも応用し、鮮やかにそのプロセスを描いているという点において他の教育書とは一線を画しているといえる。

⑥ 池田思想の独自性

ここでは、先述した池田の教育思想の一つの大きな軸ともいえる生命尊重という観点についてみていきたい。当時の幼児教育や教育全般に関する研究を概観したところ、生命の尊重に重点を置いた研究はあまり見受けられなかった。だがその中で、生命の尊重とはどういうことかについて論じた研究があったので紹介したい。菅井は「生命の尊重」について、それは「ひとりひとりの自己意識を自覚した実存の生きる意味の充足や価値の実現を尊重すること」⁽¹⁰⁸⁾であると述べ、簡単にまとめると「ひとりひとりの生き方を尊重すること」であるとまとめている。菅井は論文中で哲学的観点から生命の尊重について論じているのであるが、人間の尊厳へのまなざしなどは池田と相通ずる点があるといえる。

以上のように、家庭教育に関する多くの研究をみてきたが、その研究結果や、母親の役割や家庭における教育のあり方について池田の思想との多くの関連性を見出すことができた。その意味

尾田『「心の教育」実践大系 家庭における心の教育』。

⁽¹⁰⁸⁾ 菅井保「生命尊重の教育研究序説：生命への教育学的問い」東海大学紀要・課程資格教育センター、1998年、7頁。

で池田の思想は「人を育てる」という観点において普遍的な部分も多く、他の研究者との大きな相違点を発見することは困難であった。だが、そのなかでも池田の教育思想の独自性は何かとしたときに、私は先にも述べた生命尊重の精神の重視と、さらには幼児期からの大きな世界観の育成を目指したことをあげたいと思う。池田は、幼児期の家庭教育において、子どもにとっての認知的発達や基本的習慣などのしつけ、ならびにバランスの取れた人格形成を促すことのみならず、的確な世界観を持つことを促している。もっともこの自然や宇宙に対する生命観、世界観といったものは、親の強制によってなしうるというよりは、どこまでも子ども自身が形成していくものであり、親はその支援をするにすぎない。牛島は正しい世界観を持つことの重要性について以下のように述べている。「もともと世界観は教育の究極の目標であり、これを説かない教育は不徹底なものである。はっきりした世界観をもたない人間は信頼のおけない無性格な存在である」⁽¹⁰⁹⁾。池田は、知識が増せば増すほど、自然・生命への畏敬の念が養成されるべきだとし、宇宙・生命・人間への敬いの心の再発見を子どもに促すための親のはたらきかけの重要性について説いている⁽¹¹⁰⁾。この点は、既存の幼児教育に関する書や育児書にはとりわけ強調されていなかった部分でもあり、これこそが池田の思想の核となる仏法を基調とした人間観、生命観を反映するものだといえる。教育の究極の目標は、学力や社会性、豊かな教養を身につけることのみならず、人格の核としての確固たる信念に裏打ちされた世界観の確立ともいえるであろう。このように、幼児教育の段階から、大きな視野に立つての生命観、世界観といったものを家庭において育むことを推奨した池田の価値観は、単なるしつけや人格形成といった範疇を超えた「人間教育」のあり方を示すものであり、その視点を家庭教育の現場というレベルにまで掘り下げ、分かりやすく提示したところにその価値があるといえるであろう。

おわりに

ここまで、池田の寄稿記事を紹介しながら、それらの教育思想が当時の教育事情や家庭教育・幼児教育に関する研究で主張されてきたこととどのように関連付けられるのかという試みを行ってきた。現代（2008年）の日本における家庭の様相と、記事が掲載された1960～80年代とは、社会背景が異なっていることを考慮しなければならないが、池田の子育てや人間性の育成に関する基本的な家庭教育観は、現在にも十分応用可能なものであり、実践的な示唆を与えると考える。

池田の寄稿記事に見られる思想は、学問的な側面というよりはむしろ、子育ての実践面での見解が多かったが、当時の教育書や家庭教育に関する論文や、教育学的・発達心理学的見地から見ても、池田の思想との共通点が多く発見でき、彼の主張の妥当性を確認できたといえる。さらに、彼独自の観点として生命尊重の精神があげられるが、これは彼自身の持つ仏法の理念が根底にあったことであろう。

池田の思想は、創価教育の父である牧口常三郎の価値創造の理念と多くの共通点があり、家庭生活、夫婦生活、子育てもすべて日々の創造的取り組みのなかで花開いていくものだと主張して

⁽¹⁰⁹⁾ 牛島義友『家庭教育と人間形成』国土社、1973年、82頁。

⁽¹¹⁰⁾ 池田「子供に教える“現代の勇氣”」。

いる。例えば信頼関係、愛情や尊敬の念を家族と交わすことも家庭でのひとつの価値創造となるであろう。そのうえで、池田は生命尊重から価値創造への一連の思想の流れを家庭教育にも応用し、鮮やかにそのプロセスを描いているという点で優れた観点を持っているといえる。さらに、教育のプロセスのなかで自分を超えた存在に気付かせ、生命そのものへの新鮮な憧憬や宇宙、生命、人間への敬いの心を軸にするべきであると述べ、より広い視野にたった世界観の育成を促している。さらに、物質主義、知識偏重の教育に流れるのではなく、人間の内なる精神的な価値に目を向けるべきであると強調している。このように、生命尊重の精神、大きな世界観の育成を幼児教育の段階から重要視するという点に、彼独自の教育観・人間観があらわれているのではないか。

教育の原点とは何か。池田は、一人一人の生命の奥に、限りない可能性を秘めた人間の心と、尊貴なる“生命の宝”を発見し、それを育てていくことであると主張している。そこには人間の生命の価値をどこまでも尊重していこうとする「人間中心」「人間主義」の精神が貫かれており、現代の「心の教育」「人間性の喪失」などの諸問題に一つの新しい視点を提供しているといえよう。